

プランタでも育てられる

みんなのコンテナ菜園

写真・文：園芸研究家●淡野一郎

カブ

浅型プランターでも栽培できる
長い歴史で豊富に品種が発達

カブは弥生時代に中国から渡来した「和種系」と、後にシベリア経由で入ってきた西欧由来の「洋種系」の品種があります。地域ごとにさまざまな在来種が発達し、愛知～福井県を結ぶ線を隔て、西は千枚漬けで有名な「聖護院」、中カブの代表品種「天王寺」などの和種が、東は赤かぶ漬けにされる岐阜の「飛騨紅」、山形の伝統野菜「温海（あつみ）」など洋種が主に分布しています。現在は、これらをかけ合わせた栽培しやすいF1品種もあります。

発芽と根の肥大適温は涼しく、種まきは春と秋が適します。まき時期は品種ごとに異なるので注意します。根菜類ですが太るのは主に根よりも子葉と根の間の胚軸なので底の浅いプランターで栽培できます。ただ、浅型プランターは土の量が限られるので、初期は乾きによる「裂根」や肥料切れによる「ス入り」に注意し、適期に収穫します。

カブの栽培方法

1 種まき

IB化成約41gと過リン酸石灰約14gを混ぜた土（12L）を長さ60cmの浅型プランター（14L）へ入れる。土をならしたら、ペットボトルのふたなどを使い、深さ1cmのまき穴を株間10cm、条間15cmになるよう開ける。まき穴に種を2～3粒まき（写真1）、土をかけ、手のひらで土を押さえ、ジョウロなどで優しく水やりする。適温を保ち、出芽までは乾かさないようにして、一斉に出芽させる。種まき直後に防虫と保温・保湿のため不織布をかけておく（写真2）。12～2月下旬までは、生育促進とトウ立ちを防ぐため不織布に保温用の園芸用フィルムを重ねトンネルにする。



ポイント 肥料の量は、小カブは3割減にする。冬は春秋の3割増、夏は株間を13cm以上と広く取り5割減にする。

2 間引き・土寄せ

種まき後2～3日で芽が出てくる。本葉3～4枚までに元気が良過ぎたり悪過ぎたり、胚軸が太いもの、立枯病で褐変している株などを、ハサミを使って1カ所1株にする（写真3）。間引き後は、株がぐらついて傷まないよう土を株元へ寄せておく（写真4）。



ポイント 土が乾き過ぎると皮が硬くなり玉が裂ける原因になるので本葉5～6枚までは土が乾き過ぎないように、一方で、梅雨や秋雨時期は雨に直接当たないようにする。



写真 ©ICHIRO AWANO

「玉波」
小カブサイズから13cm程度までの大きさで収穫できる中カブ品種。裂根やス入りが遅く、白さび病に強い

【基本情報】

- 分類：アブラナ科アブラナ属
- 原産地：北地中海沿岸、あるいはこれにアフガニスタンなど中央アジアを加えた地域など諸説
- 発芽適温（地温）：15～20度
- 生育適温（気温）：15～20度
- 日当たり：日なた／半日陰 ●好適pH：5.2～6.8

【病害虫情報】

アブラムシ類：春や秋に栽培期間が1か月を超える場合に注意が必要。種まき直後から早めに不織布をベタがけし侵入を防ぐ。
コナガ・モンシロチョウ・ヨトウムシ類：主に春と秋に幼虫が葉を食害。不織布をかけ、予防的にBT剤を散布しておくとうい。

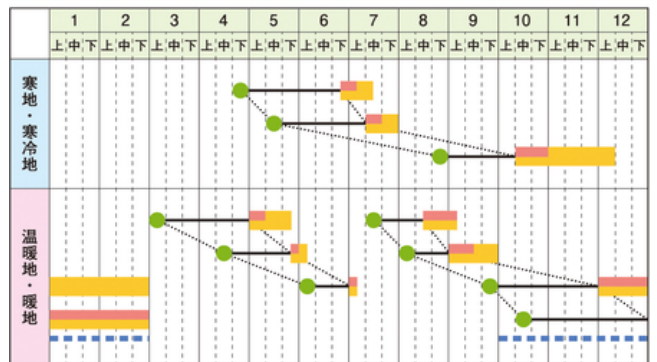
3 収穫

玉の直径が約5cmから順次収穫する（写真5）。収穫遅れは玉がスポンジ状になるス入りや裂根、葉が黄色くなる原因になる。小カブの場合、収穫サイズになってからの収穫適期は、春・秋どりが3日前後、冬どりは7日まで、夏どりは2～3日が目安。一方で中カブは小カブサイズから長く収穫できる。



ポイント 収穫は、霜の降りる11～3月は夕方に、それ以外の時期はカブの水分が多い朝に行う。収穫したら、早めに水洗いして土を落とす。

栽培カレンダー



※温暖地を基準に記事を作成しています。